

「恰も一身にして二生を  
 経るが如く、一人にして兩  
 身あるが如し」。福澤諭吉  
 は中津藩の下級武士の家に  
 出生、3度の洋行を経て明  
 治維新を迎え、近代主権国  
 家日本の建設を求め飽くこ  
 となく執筆活動をつづけ  
 て、明治34年(1901年)  
 に没した。維新を挟んで前  
 後33年ずつの激変の時代を  
 生き、慶応2年の『西洋事  
 情』の刊行以来、オビニオ  
 ンリーダーの座を誰にも譲  
 ることのなかった希有の思  
 想家である。「一身にして  
 二生を経」た人間の思想が  
 終始一貫しているはずがな  
 い。福澤の強烈なリアリス  
 ムが思想の論理整合性を許  
 さなかったのでもあろう。  
 福澤といえは「天は人の

## 読書術の半歩遅れの



渡辺 利夫

上に人を造らず、人の下に  
 人を造らず」と説く天賦人  
 権論を想起させる平等主義

### 福澤諭吉の思想

者であり、「政府は国民の  
 名代にて、国民の思う所に  
 従い事を為すものなり」と  
 述べて社会契約論を彷彿さ  
 せる啓蒙思想家のごとくに  
 描かれるのが通例である。  
 リベラリズムの汪溢した戦  
 後日本において、自分の思  
 想の淵源を福澤に求めたい

という願望がこのような福  
 澤像を生み出したのである  
 うが、いかにも一面的であ  
 る。福澤の思想ははるかに  
 多層的である。

矛盾に満ちた人間社会の  
 虚実を伶俐に見据え、なお  
 文明に近づかんとする思想  
 的苦闘が福澤のものであっ  
 た。畢生の大作『文明論之

### 対極の論あり多層的

概略は「西洋の文明を目  
 的とする事に始まり、委細  
 を尽くして文明と日本との  
 関係を論じ、最後には「国の  
 独立は目的なり、今の我文  
 明はこの目的に達するの術  
 なり」との結論に至る。こ  
 の反転論理の綾なす中に福  
 澤思想の核心を私はみる。

『学問のすゝめ』に表れ  
 る初期の福澤思想の対極を  
 鮮やかに浮かび上がらせる  
 論説が、明治10年の「丁丑  
 公論」ならびに明治24年の

「瘠我慢の説」である。前  
 者では、西南戦争をもって  
 新政府に挑んだ西郷隆盛を  
 批判する時のジャーナリス  
 ムは、西郷の士風を軽んじ

不利は決して少々ならず」  
 と嘆じた。いずれも、スピ  
 ード感あふれる一気呵成の  
 論説である。

「瘠我慢の説」の第1行  
 目は「立国は私なり、公に  
 非ざるなり」とある。士風、  
 士魂という「私情」を劣化  
 させてしまえば、列強の暴  
 力的な「西力東漸」に抗し  
 て日本が独立を

て「抵抗の精神」を衰頹さ  
 せる「文明の虚説」だと難  
 じた。また「瘠我慢の説」  
 では、高位の幕臣でありな  
 がら新政府の要職に就いて  
 権勢を振るった勝海舟と覆  
 本武揚の処世を糾弾して  
 「数百年養い得たる我日  
 本武士の気風を傷つたるの

え私情こそが「立国の公道」  
 でなければならぬと説  
 く。福澤思想の他面は、伝  
 統精神を背負った純なるナ  
 ショナリズムに他ならな  
 い。懇切な注を付した『福  
 澤諭吉著作集』全12巻、慶  
 応塾大学出版会が最も  
 読みやすい。(経済学者)